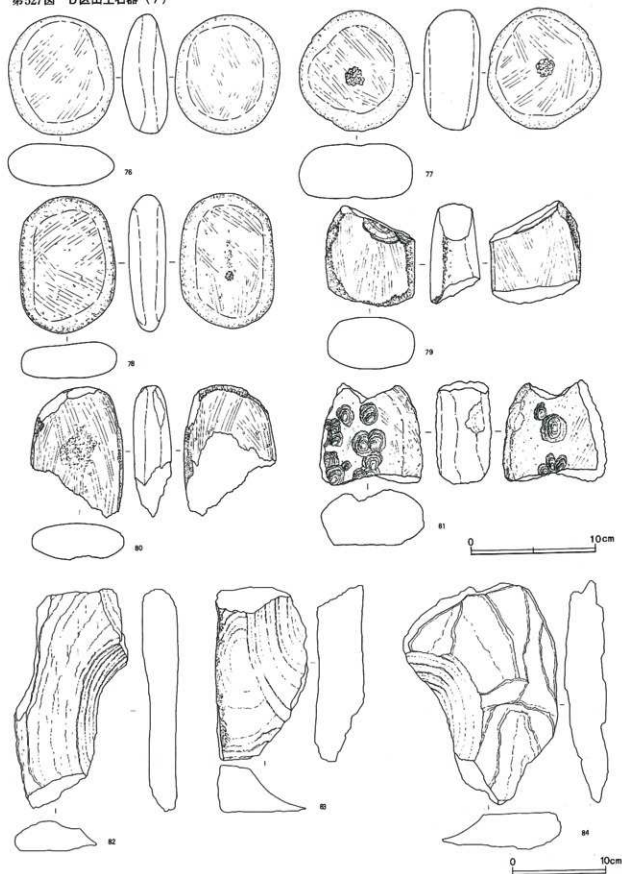


図版番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
第522図 1	SJ17	有舌実器	(7.30)	2.00	0.70	7.30	黒色頁岩	
第522図 2	SJ1	石 鏃	2.60	2.10	0.80	2.90	チャート	
第522図 3	SJ3	石 鏃	1.75	1.30	0.30	0.38	黒曜石	
第522図 4	SJ3	石 鏃	2.70	1.70	0.40	1.10	チャート	
第522図 5	SJ3	石 鏃	1.60	1.30	0.30	0.32	チャート	
第522図 6	SJ4	石 鏃	2.10	1.70	0.30	0.77	チャート	
第522図 7	SJ6	石 鏃	2.30	1.80	0.35	0.71	チャート	
第522図 8	SJ6	石 鏃	(2.40)	2.10	0.70	2.90	チャート	
第522図 9	SJ7	石 鏃	2.40	2.40	0.70	3.76	チャート	
第522図 10	SJ7	石 鏃	1.95	2.00	0.30	0.89	チャート	
第522図 11	SJ7	石 鏃	2.70	2.20	0.70	2.61	チャート	
第522図 12	SJ7	石 鏃	(2.20)	3.00	0.80	4.15	チャート	
第522図 13	SJ7	石 鏃	(2.80)	(1.60)	0.30	1.04	ホルンフェルス	風化顕著
第522図 14	SJ8	石 鏃	1.50	1.30	0.30	0.38	黒曜石	
第522図 15	SJ8	石 鏃	2.70	1.40	0.40	1.20	チャート	
第522図 16	SJ8	石 鏃	2.25	1.60	0.35	0.92	チャート	
第522図 17	SJ8	石 鏃	(1.50)	1.70	0.35	0.77	チャート	(赤色)
第522図 18	SJ8	石 鏃	(1.80)	1.80	0.50	0.96	チャート	
第522図 19	SJ11	石 鏃	(1.60)	(1.50)	0.30	0.54	チャート	
第522図 20	SJ11	石 鏃	2.30	1.30	0.30	0.69	チャート	
第522図 21	SJ14	石 鏃	1.90	1.70	0.40	0.75	チャート	
第522図 22	SJ21	石 鏃	1.70	1.90	0.30	0.60	チャート	
第522図 23	SJ14	石 鏃	2.00	1.40	0.40	0.60	チャート	
第522図 24	SJ14 卍	石 鏃	2.00	1.50	0.30	0.65	チャート	
第522図 25	SJ14	石 鏃	3.00	1.60	0.30	1.00	チャート	
第522図 26	SJ17	石 鏃	2.40	2.00	0.80	3.30	チャート	
第522図 27	SJ20	石 鏃	2.20	1.70	0.40	0.66	チャート	
第522図 28	SJ20	石 鏃	2.90	2.40	0.60	3.12	黒色頁岩	
第522図 29	SJ26	石 鏃	2.80	2.20	0.40	1.17	黒曜石	
第522図 30	SJ26	石 鏃	1.40	1.40	0.40	0.40	チャート	
第522図 31	SJ26	石 鏃	2.40	1.70	0.30	0.81	チャート	
第522図 32	SJ32	石 鏃	2.00	2.00	0.40	1.29	黒色頁岩	
第522図 33		石 鏃	2.80	1.40	0.30	0.94	黒曜石	
第522図 34	SJ38	石 鏃	1.80	1.40	0.30	0.71	赤色チャート	
第522図 35	SJ60	石 鏃	1.60	1.50	0.40	0.52	チャート	
第522図 36	SJ64	石 鏃	3.10	2.80	0.50	2.02	チャート	
第523図 37	A-22	石 鏃	2.00	1.80	0.30	0.73	チャート	
第523図 38	C-18	石 鏃	2.70	2.60	0.60	3.83	チャート	
第523図 39	D-17	石 鏃	1.80	1.60	0.30	0.61	チャート	
第523図 40	D-18	石 鏃	1.30	1.40	0.30	0.37	黒曜石	
第523図 41	E-18	石 鏃	3.00	2.00	0.40	1.80	凝灰岩	
第523図 42	E-19	石 鏃	1.90	1.50	0.40	0.69	赤色チャート	
第523図 43	F-17	石 鏃	1.40	1.30	0.40	0.41	黒曜石	
第523図 44	F-18	石 鏃	2.70	2.10	0.70	2.41	チャート	
第523図 45	SJ23	石 鏃	3.50	0.80	0.60	1.40	チャート	
第523図 46	SJ60	石 鏃	4.80	1.00	0.50	1.85	チャート	
第523図 47	SJ55	石 鏃	4.70	2.10	0.60	4.50	安山岩	
第524図 48	D-18	磨製石斧	14.00	6.30	3.80	596.00	硬砂岩	
第524図 49	SJ26	磨製石斧	8.75	7.85	3.65	380.00	硬砂岩	
第524図 50	SK37	磨製石斧	11.75	5.25	2.85	304.00	硬砂岩	
第524図 51	SJ7	打製石斧	(8.20)	6.80	1.50	154.00	ホルンフェルス	
第524図 52	SJ8	打製石斧	10.30	4.45	0.95	77.00	砂岩	
第524図 53	SJ11	打製石斧	10.60	5.90	1.70	163.00	ホルンフェルス	
第524図 54	SJ11	打製石斧	10.50	5.75	2.45	141.00	粘板岩	
第524図 55	SJ12	打製石斧	13.60	4.95	2.30	252.00	ホルンフェルス	
第524図 56	SJ14	打製石斧	12.00	5.80	2.10	218.00	ホルンフェルス	
第524図 57	SJ14	打製石斧	10.05	4.95	1.30	77.00	ホルンフェルス	
第524図 58	SJ14卍	打製石斧	9.30	5.75	2.10	146.00	ホルンフェルス	

第527图 D区出土石器(7)



国版番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
第525図 59	SJ14	打製石斧	8.80	3.50	0.80	59.00	ホルンフェルス	
第525図 60	SJ14	打製石斧	12.05	4.30	3.55	231.00	ホルンフェルス	
第525図 61	SJ25	打製石斧	8.20	5.00	1.90	126.00	粘板岩	
第525図 62	SJ32	打製石斧	10.50	5.90	1.30	91.00	砂岩	
第525図 63	SJ32伊跡	打製石斧	10.70	4.20	1.40	69.00	黒色頁岩	
第525図 64	SJ33伊	打製石斧	10.20	5.50	2.00	197.00	ホルンフェルス	
第525図 65		打製石斧	11.30	5.20	1.45	121.00	ホルンフェルス	
第525図 66		打製石斧	9.45	5.60	2.40	148.00	ホルンフェルス	
第525図 67	SJ47	打製石斧	9.45	5.90	1.55	117.00	ホルンフェルス	
第525図 68	SJ62	打製石斧	9.00	4.40	1.95	78.00	ホルンフェルス	
第525図 69	SJ8	石錘	7.50	3.25	1.30	49.00	硬砂岩	
第525図 70	SJ20	石錘	6.80	5.05	1.35	57.00	砂岩	
第525図 71	SJ21	石錘	5.30	3.30	1.65	42.00	砂岩	
第526図 72	SJ3	磨石	16.05	11.35	7.35	1373.00	砂岩	
第526図 73	SJ8	磨石	13.15	9.05	4.30	787.00	安山岩	
第526図 74	SJ26伊	磨石	9.70	8.55	4.45	533.00	砂岩	
第526図 75	SJ60	磨石	12.05	9.65	5.25	653.00	砂岩	
第527図 76	SJ7	磨石	9.50	8.55	3.65	407.00	安山岩	
第527図 77	SJ14	磨石	9.60	9.10	4.45	602.00	安山岩	
第527図 78	SJ14	磨石	10.80	7.65	2.95	377.00	安山岩	
第527図 79		磨石	7.95	7.00	4.00	400.00	硬砂岩	
第527図 80	SJ37	磨石	10.40	7.35	3.05	305.00	硬砂岩	
第527図 81	SJ62	磨石	8.00	8.20	4.30	366.00	安山岩	
第527図 82	SJ32	石皿	23.80	8.75	4.90	1250.00	緑泥片岩	
第527図 83		石皿	18.80	9.45	4.95	1328.00	緑泥片岩	
第527図 84	SJ64	石皿	23.70	12.80	9.40	1751.00	緑泥片岩	
第528図 85	SJ11	石皿	27.85	10.95	12.95	6500.00	花崗岩	
第528図 86	SJ3	石皿	18.50	14.90	6.10	2400.00	紺雲母片岩	
第528図 87	SJ13	石皿	21.40	15.20	6.30	3400.00	緑泥片岩	

によって握りを形成するのが普通であるが、73は破碎した磨石を再利用したものとみられ、徹底した敲打によってスタンプ形をつくり出している。

A区出土の磨石にみられた石質・形態上の2者は、D区においてもやはり存在する。76～78はA類、79・80はB類である。

A類に完形品が数多く存在するのに対し、B類はすべて破損品であり、中には79のように破損品の周囲に敲打整形を加えた再生品までも存在する点は、両者の用途の相違を考える上で何らかの材料となるものと思われる。

A類はいずれも安山岩、B類はいずれも硬砂岩を用いている。

81は磨石転用の凹石である。表裏両面に無数の小孔が穿たれており、頻繁な使用が想像される。

石皿は多数出土したものの、いずれも破片の状態で

あり、図化に耐えるものは限られていた。

82～84は頻繁な使用によって使用面が擦り切れ、裏面までほぼ貫通した状態で破碎したものである。83は新旧の使用面が切り合っている。

85は第11号住居跡床面の竈の1つである。柱状の礫の自然な平坦部分を使用面としたもので、平滑ではあるが凹面をなさない。一般的な意味での石皿とは異なる機能が推定される。

今回の調査で出土した石皿はほとんどが礫の自然の形状を生かしたものである。完形品がほとんど存在しないため確かなことはいえないが、まれに定型的なものも存在したようだ。

86は胴張り長方形の石皿がほぼ1/4に分割されたものであろう。87も胴張りの長方形に整形されているものと思われるが、周縁における敲打等の痕跡は顕著ではない。

第528图 D区出土石器(8)



(8) 土・石製品 (第529図)

1は耕作土中から出土したもので、滑石製の垂飾である。縦長の台形で、人体を模したものとみられるが、顔面にあたる部分が剥落している。頭部中央には裏面から加工された貫通孔を有する。

両側からの抉入や小突起によって首と腕が表現される。上半身と下半身は横位の沈線で区分され、下半身は表面に2条、裏面に1条の沈線が垂下して2分割され、これが両脚の表現となっている。脚部表面には細沈線の格子目状モチーフが描かれる。

長さ4.5cm、幅2.6cm、厚さ7mmを測る。

2は第8号住居跡出土の蛇紋岩製垂飾である。やや

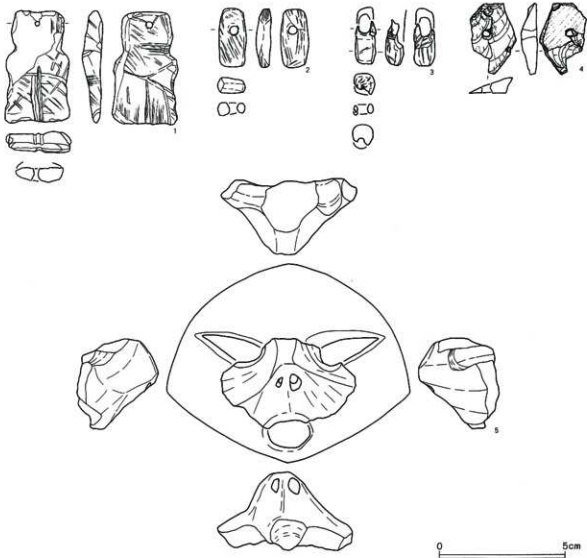
第529図 D区出土土・石製品

胴張りの短冊型を呈し、中央やや上方に両面加工の貫通孔を有する。

3は第18号住居跡から出土したもので、滑石製の垂飾である。直方体で、一端に貫通孔を有するが、孔より上を欠損している。

4は包含層中から出土したもので、黒曜石製の剥片を穿孔したものである。剥離面に偶然現れた気泡を揉み広げたものと思われ、一種の垂飾とみられるものである。裏面には広く節理面が残存する。

5は包含層中から出土した顔面装飾の中央部で、中空構造である。土偶か、人面把手に付随するものであろう。



Ⅷ 結語

1. 加曾利E式土器について

本遺跡からは160軒に及ぶ住居跡が検出され、うち1軒は奈良時代の堅穴住居跡であったが、時期の判明している限りにおいて、残る全てが加曾利E式およびこれに後続する時期の住居跡であった。

復元可能な土器もまとまった量が出土しており、それらの時間的なつながりも良好であるため、入間台地における縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての土器群の推移を知るうえで絶好の資料となるものと思われる。

ただし、本文中に再三述べたとおり、攪乱や表土の流失などにより遺構の残りが悪く、全く遺物を伴わない住居跡もざらであった。また、多量の遺物を出土しながらも、重複が激しすぎて遺物の遺構への帰属関係がはっきりしない地点も少なくない。

必然的に、分析の対象は単独、あるいは切り合いの比較的少ない住居跡や、埋壘・炉土器のセットなど、限られた資料にしばらざるを得なかった。欠落は周辺地域における同時期の資料によって随時補った。なお、「キャリバー類」・「掘山類」等土器の類型名称の一部については(谷井・細田1997)に準拠した。

第1期

加曾利E式古段階である。口縁部文様帯を持つキャリバー類が成立する一方で、組成中に曾利式や前段階の勝飯・中峠系の土器を含み、そのみで土器のセットを構成する例も少なくない。

C区第2・3号住居跡がこの段階に該当する。いずれもキャリバー類と勝飯・曾利系の土器を中心とするセットである。

キャリバー類は水平口縁で横S字系の文様を描く、武蔵野台地型の深鉢である。横S字文は2本隆帯で描かれ、中途に刺棘状や十字状のモチーフが挿入されており、完全なS字を構成していない。頸部無文帯の存在は明確でない。地文はいずれも燃糸文である。モチーフと文様帯上下の隆帯区画は縦位の平行隆線によって

連結され、これが次段階には櫛歯状の隆線へと変化されるものとみられる。

曾利系の土器は無文地に棒状工具の平行沈線で文様を描くもので、隆帯や沈線による窓枠状の区画内部に沈線文が描き込まれる例が多い。

平行沈線間に、3~4本、あるいはそれ以上の短沈線を交互刺突風に配置して、ジグザグのモチーフを描く手法も常套的なものである。

3は独特の細隆線文で、三角形の区画内部に渦巻き風の同心円文を充填するものである。6は円筒形の小型深鉢で、口縁直下に横S字モチーフが巡り、胴下半部に燃糸文が施文される。描かれている文様自体は中部高地的であるが、加曾利E的な文様帯の解釈がなされているといえよう。

なお、胴部における懸垂文の存在は、口縁部文様帯の分離と並ぶキャリバー類最大の特徴といえるものだが、この段階では同類の深鉢よりも別系統の小型深鉢や広口壺に顕著にみられている点には注意したい。

第2期

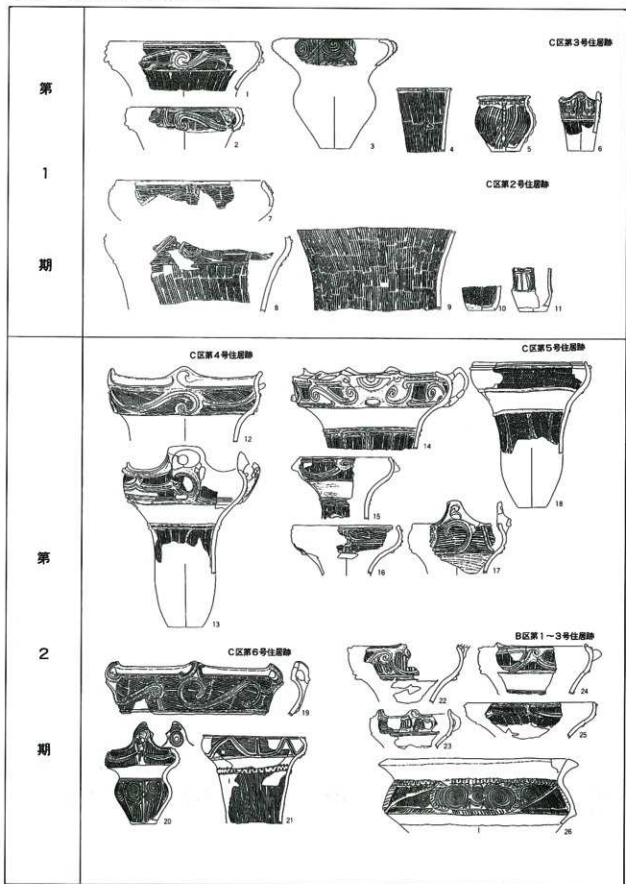
加曾利E式新段階である。口縁部渦巻文と胴部懸垂文というキャリバー類の構成要素が出揃う。これは中期末葉まで一貫して引き継がれ、われわれの加曾利E式のイメージを決定づけることになる。また、繫弧文が成立する。

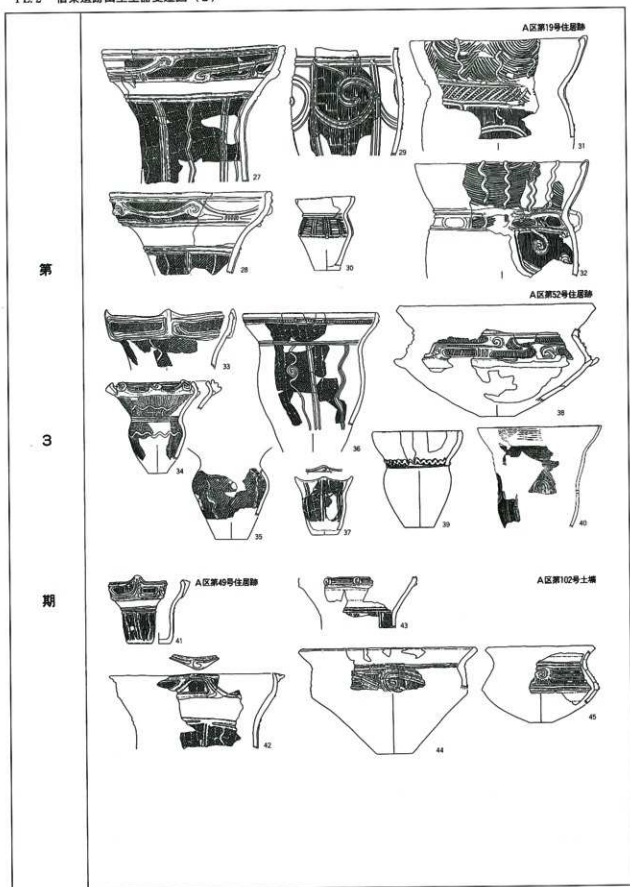
B区第1~3号住居跡、C区第1・4・5・6号住居跡がこの段階に該当する。

キャリバー類は波状口縁が普通にみられる。中空の大型把手が付される例も多く、原因として下総台地からの影響が考えられる。14の箱形の中空把手は、原遺跡第14号住居跡に類例をみることができる。

21は波状に巡る隆帯の中途に十字文風のモチーフが介在するもので、より古段階としたい誘惑にも駆られるが、交互刺突を伴う扁平な隆帯が26の胴張り浅鉢に共通しており、共存遺物全体の組成からみても、こと

PL.1 宿東遺跡出土土器変遷図(1)





さらに古く位置づける根拠は薄いように思われる。

頸部には無文帯が普通に存在する。胴部との境は2本隆帯によって区画され、これを起点に隆帯懸垂文が垂下する。2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文の交互配置がすでに確立している一方で、15には懸垂文から分岐する渦巻きモチーフも出現している。

繫弧文は上下を隆帯によって明確に区画した中に弧状の隆帯を巡らせるものである。末端の渦巻文が受け口状に突出するなど、基本的にS字文の延長線上にあるものである。

ただし、25は弧線の上下で地文を変えている。器形の中で文様配置からいっても、連弧モチーフの上下をそれぞれ別の文様帯として意識していることは明らかで(文様帯下端の隆帯が頸部の半ばに巡られる構成には明らかに無理がある)、これは次段階へとつながる要素といえそうである。

20は胴部中段がくびれ、口縁部内湾して胴下半部の張り出すいわゆる「キャリバー形」を呈する深鉢である。

口縁部文様帯は繫弧文であるが、地文は棒状工具の集合沈線である。胴部文様は平行沈線の懸垂文間に渦巻文と縦位の集合沈線が垂下するもので、馬高式の胴部文様の構成に類似している。

水平口縁上に立体的な突起を1点配する手法は前段階の東関東にもみられるが、内部の平坦面に描かれた同心円文は、井戸尻式の人面把手をも連想させる。

極めて多様な影響関係のもとに成り立っている個体であり、「××系」といった単純な捉え方では理解不能な土器であるといえよう。

26は口縁外屈する胴張りの浅鉢である。三角形の区画内部に描かれた同心円文は前段階にもみられたが、沈線のみによって描かれる点が時期差として理解できよう。

第3期

加曾利EⅡ式古段階である。口縁部渦巻文のキャリバー類の存在が安定すると同時に、曾利Ⅱ式系の土器の流入が顕著になる。また、連弧文土器出現の条件が

整う時期であるともいえる。

A区第19号住居跡出土土器を好例として、同区第49・52号住居跡、同区第102号土城等がこの時期に該当する。

キャリバー類は水平口縁が卓越する。横S字文のような大柄の曲線モチーフは口縁部文様としてはあまりみられなくなり、2本隆帯の間の絵画部分が末端でゼンマイ状に巻く渦巻き文が取って代わる。文様モチーフは櫛歯状の隆線によって上下の区画に連結される。頸部から下の構成は前段階から基本的に変わっていない。ただし器形的には、前段階ははまだ円筒形の胴下半部が主流であったのに対し、胴下半部が膨らみ、底部がつままるキャリバー形が主流となる。

繫弧文は弧状の隆帯そのものが口縁部文様帯下端の区画を構成するものが出現し、以下、胴部中段の区画線までが一段の文様帯として意識されるようになる。

一方で、キャリバー類的な文様を棒状工具や半裁竹管状工具の沈線によって簡易に表現する、一般にやや小型の深鉢が一群として分化する。こうしたものの中には頸部無文帯を持たないものも多く、さらには口縁部の文様帯を省略したものも現れる。就中、36のような個体が繫弧文土器とともに連弧文土器生成の母体となってゆくものとみられる。

第4期

加曾利EⅡ式新段階で、連弧文土器が盛行する段階である。また、曾利Ⅱ式系の土器に加えて唐草文系の土器が流入するようになる。A区第44号住居跡出土土器を好例として、同区第1・68号住居跡等がこの時期に該当する。

キャリバー類は隆帯渦巻文が口縁部文様帯を分割し、間に楕円ないし長方形の区画を生成するものが現れる。一方で、S字文の流れをくむ入り組み状の渦巻文も健在であり、両者の対照は次段階においてより鮮明に現れることになる。

それにしても、大型深鉢の多くが頸部無文帯を残存させるありかたは武蔵野台地的なカラーといってい

胴部における文様構成は前段階と変わらない。ただ、半裁竹管状工具の内面でなでつけたような扁平な隆帯で懸垂文等が描かれるものはこの時期に顕著になるようだ。

沈線文主導の小型深鉢が組成の一部を占める点は相変わらずであるが、特に連弧文土器との類似が著しい。なお、台付きの小型深鉢の出現はこの時期の出来事であるようだ。

また、繫弧文土器も健在である。52の土器における頸部無文帯の残りかたは、次段階におけるキャリパー類の頸部無文帯の残りかたを理解するうえで興味深いものとなっている。

連弧文土器は成立と同時に既存の諸類型との交渉にさらされ、すでに複数のバリエーションを生み出している。主文様は弧状の平行沈線を横位に連続させる連弧モチーフを基本として、波状文、鋸歯文などが存在する。また、次段階につながる要素として54ですでに連弧文と懸垂文の融合がみられる点には注意しておく必要があろう。

胴部中段の区画をはさんで、上下に相似形の平行沈線文が描かれるのが連弧文土器としての個性になるわけだが、胴下半部にキャリパー類的な交互懸垂文が描かれる例が宿東遺跡（日高市教委調査分）第11号住居跡等にみられる。水平な区画を介した上下二段構成の文様帯配置が、他類型との文様の互換を容易なものとしているものと思われる。

第5期

以下で述べる第5期、後続する第6期は本遺跡A区・D区において遺構数の爆発的な増加がみられる時期である。土壌一括や、炉体・埋塞レベルでの共存等、ある程度信頼の置ける一括資料も豊富で、また前後の資料とのつながりも良好である。そこで、第5・6期に関しては前段階までは記載のスタイルを変え、遺構一括資料ごとに検討を加え、それらの相互の関係の中で中期後業から末業への流れを明らかにしてゆきたい。

なお、中期末業に属する土器の型式呼称として、1

段階としての加曾利EⅢ式を用い、その前段階を加曾利EⅡ式後業とする意見（谷井・細田1997）と、加曾利EⅢ式内部の古・新段階にそれぞれ位置づける意見（金子1997）の両者が存在するのは周知の通りである。

本書では現在の共通認識に従い、吉井城山類と呼ばれる一群の土器の存在をもって加曾利EⅢ式の成立と考えた。さらに、広義の吉井城山類の出現を中期末業でなくその前段階に設定した。

従って、本書における型式呼称は中期末業である第6期を加曾利EⅢ式新段階とし、これに先行する第5期を加曾利EⅢ式古段階と呼ぶ。これらの呼称は、もとより土器群の内容全体に関わるものではなく、土器組成や住居形態などにおいて後期に連続する要素が出揃う時期として、中期末業＝加曾利EⅢ式の独立を認める立場にも首肯できるものがある。

さて、加曾利EⅢ古段階はキャリパー類において磨消し懸垂文が出現し、また、磨消し連弧文が出現する時期である。両耳壺は存在する量が少なく、未だ胴張りの浅鉢が主流である。

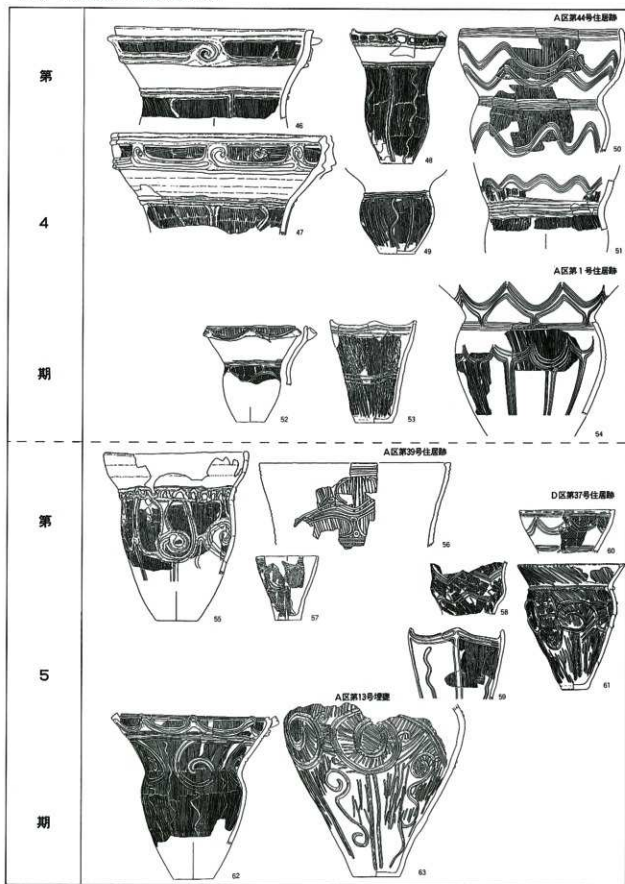
D区の第38号住居跡がこの時期の最もまとまった組成を示している。キャリパー類は波状口縁（64）と水平口縁（65）が存在し、口縁部文様帯は前者が入り組み渦巻文を描き、後者は渦巻文と楕円形の区画文を一筆書き状に描く。浅鉢系の器形として両耳壺ではなく、胴張りの浅鉢（68）が共存している。

連弧文土器（67）は4単位波状口縁で、胴部中段にくびれを持つ。中段に区画を設けない2段の連弧文である。地文は斜位の集合沈線である。器形にキャリパー類、地文および頸部から底部までを一帯とみる文様構成に唐草文土器の影響がうかがわれる。

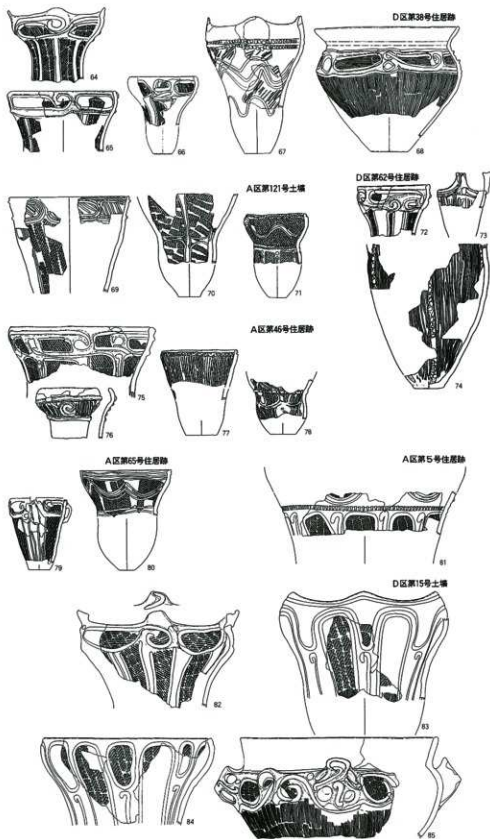
55～63は曾利・唐草文系の土器を含むセットであり、当初第3期からの連続性を考慮して第4期に含めたが、県北部における類似の資料には磨消し懸垂文のキャリパー類を共存するものが存在する。本遺跡における第4期の曾利・唐草文類については資料が不足しており、ここでは論じるすべを持たない。

A区第39号住居跡は、連弧文と曾利Ⅱ式系の土器の

PL. 3 宿東遺跡出土土器変遷図 (3)



第
5
期



セットである。連弧文土器 (56) には付加的な文様要素が豊富に存在し、モチーフと上下の区画を接続する対弧状の平行沈線や、それらの交点にあしらわれるC字沈線などは比較的良好に用いられるところである。

曾利Ⅱ式系の土器 (55) は、同系の末期的な様相を呈している。器形・文様構成は意外ほど原型に忠実であるが、形骸化した龍目文、表面をなでつけた扁平な隆帯に最盛期との違いを見いだせる。また、頸部の区画と渦巻文との間に対弧状の隆帯で連結する手法は明らかに連弧文土器の副文様からの借用である。

第37号住居跡は連弧文土器と唐草文土器を中心としたセットである。文様構成上同一時期と考えたが、住居跡自体は中期末の住居跡と切り合っていることを予め断っておく。

60Iは、胴部中段の区画が長楕円形の区画文である点を除けば、80と同様極めてベーシックな連弧文土器である。一方で、58Iは2段の鋸歯状モチーフを平行沈線や単独・副列の波状沈線によって繁雑に連結するものであり、ソロバン/玉状に張り出す器形も含め、大幅な崩れを示す資料である。

唐草文の土器 (61) は縦位の集合沈線を地文とする。大宮台地や県北部でみられるハの字状の短沈線を地文とするものは比較的に少ないようである。渦巻文部分における集合沈線の施文方法は、次段階における充填編文手法へと受け継がれてゆく。

A区第13号埋壘は繫弧文土器と唐草文土器のセットである。繫弧文土器 (62) は口縁部文様帯下端を平行沈線によって区画し、ここから直に胴部文様帯へと接続している。胴部には波状沈線の懸垂文が垂下し、懸垂文間には3本沈線のJ字文が描かれる。

唐草文土器 (63) は2本隆帯で文様が描かれる点、懸垂文間に上下閉塞のわらび手モチーフが配される点を除けば61の個体に極めて近い資料である。

A区第121号土壌からは典型的な磨消し連弧文が出土している (71)。胴部中段に列点を伴う平行沈線の区画が巡り、胴下半部には磨消し連弧文が描かれる。

同時に出土した深鉢胴部 (70) には、磨消し懸垂文

に対弧状の沈線で横位に連結するH字状の懸垂文が描かれる。頸部から上を欠くが、口縁部文様帯を持つキャリバー類であろう。

D区第62号住居跡は連弧文系の土器を含まないが、同時期の組成であろう。キャリバー類 (72) は水平口縁で入り組み状の渦巻文が描かれ、磨消し懸垂文が垂下する。

曾利系の隆帯文土器 (74) はこの時期出現するものであろう。紡錘形の胴部で、内湾する貧弱な口縁部が付されるものとみられる。隆帯上には交互刺突風の刻みが施される。北関東系の土器であり、栃木県三輪仲町遺跡にまとまった資料が存在する (120~122)。

これに伴うコップ形の小型深鉢 (73) は、口縁上に上向き渦巻文を描く柱状の突起が配される。

A区第46号住居跡も連弧文系の土器を含まないが、キャリバー類 (75) の形態から同時期と思われる。水平口縁で、入り組み風の渦巻文が横位に展開する。胴部には磨消し懸垂文が垂下し、無文部にわらび手状の沈線が垂下する。

コップ形の深鉢 (77) は口縁部に交互刺突を巡らせ、胴部に平行沈線の懸垂文と単沈線の蛇行懸垂文が垂下するもので一見古い特徴を備えた土器であるが、地文燃糸文の1面の単筋編文を施文している。「異原体の挿入」によるリズムの崩し手法は加曾利EⅢ式期の前後に、関東地方から東北地方南部で広く用いられているものである。

A区第5号住居跡は2軒の切り合いとみられ、新旧2段階の伊跡を検出している。

このうち伊跡2と呼んだ旧段階の伊体土器 (81) が加曾利EⅢ式古段階のものと思われる。押し引き文風の沈線によって胴部中段を区画し、胴下半部に逆U字状の磨消しモチーフを描くもので、ここまでは典型的な磨消し連弧文の手法といえる。

胴上半部には弧状の隆帯が配されており、こちらは連弧文ではなくキャリバー類的な口縁部文様帯が描かれるものであろう。

伊跡1とした新段階の伊体土器 (第20図1) は入り

組み渦巻文の口縁部に唐草文系の胴部文様が組み合うもので、これらの主文様の間に楕円文・わらび手状沈線など繁雑な副文様が描かれる。

整った入り組み渦巻文が描かれているものの、同区第56号住居跡では非常に類似した土器(86)が柄鏡形住居跡の伊体土器として用いられており、第5号住居跡は加曾利EⅢ古・新段階の住居跡が切り合っているものと考えられる。

A区第65号住居跡出土の連弧文土器(80)は3本沈線による比較的ベーシックな連弧文であるが、これと組み合うキャリバー類(79)はコップ形の器形に水平口縁+区画文系の口縁部文様帯で、胴部に磨消し懸垂文を描く個体である。

この段階には磨消し連弧文以外に本住居跡のような古臭い外見を持つものが残存しているものとみられる。強いて前段階との違いを挙げるならば、*口縁直下の区画部分が研磨され、地文が磨り消されている。

*地文織文であり、かつ施文が粗い。等が指摘し得る。

上記の他、A区第2・30・33・37・47・59・64・73号住居跡、同区第33・66・97・153号土壌、D区第6・7・8・11・14・15・29・37・61号住居跡、同区第43号土壌等がこの段階の住居跡であろうと考えられる。

D区第15号土壌は初期の吉井城山類(以下、吉井城山類)を含む組成である。キャリバー類は波状口縁に内文を持つ突起を配するもので、児玉町将監塚遺跡に多数の類例がみられ、多くが磨消し連弧文を伴い出している。また、4個の中空把手を配する四耳壺は児玉町古井戸遺跡第35号住居跡に類例をみることができる(123~125)。

初現的な吉井城山類の構成要素である大波状の区画と懸垂文の融合は、すでに見たとおり前段階において既に成立しており、本段階における吉井城山類の成立は決して唐突なものとはいえないだろう。共存遺物不明のため図示しなかったが、A区第40~43号住居跡出土の原吉井城山類(第95図9)と、同区66号土壌出土

の連弧文土器(第250図1)、さらに同区第121号土壌出土の連弧文土器(71)等との間に有意な段階差を見出すことは困難なのではなからうか。

この段階の組成中に吉井城山類の土器を含む例としては、宿東遺跡(日高町調査分)第1号住居跡(126~128)、児玉町古井戸遺跡第48・134号住居跡等が挙げられる。児玉町将監塚遺跡第50号住居跡では内文突起のキャリバー類および磨消し連弧文と共存している(129~131)。

第15号土壌出土遺物が第5・6期中立的な位置を占める資料であることは確かである。その意味で非常に危険を伴う本資料を敢えて呈示したのは、吉井城山類の出現期を一段階遅らせることで、これまでの編年案のウイークポイントであったと考えられるキャリバー類の細分に、一定の基準を設けることができると考えたからである。

第6期

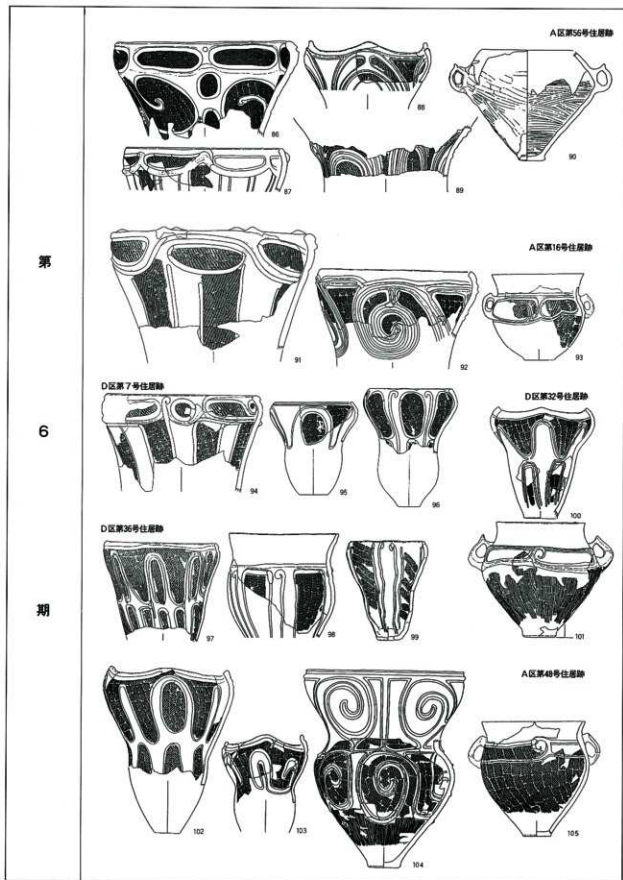
加曾利E式新段階である。キャリバー類は大半が口縁部文様帯に崩れを生じ、波状区画文や楕円文化する個体が頻出する。器形的にも頸部に段を持つものは減少し、胴部中段から単調に開いた後に口縁部で内屈するタイプが主流となる。

前段階で出現した吉井城山類が連弧文系の土器に取って代わる段階でもある。吉井城山類は弧状モチーフと逆U字モチーフが上下に対向するタイプ、胴上半部に玉抱き文を持つタイプが現れ、一方で前段階以来の波状区画+懸垂文のスタイルも残存し、後期初頭の岩坪類に引き継がれる。

唐草文系の土器から縄山類が明確に分化する。唐草文自体や曾利系の経帯文土器の動向は不明だが、前段階の隆盛からのギャップを考慮するなら、何らかのかたちで残存する可能性が高い。ただし、今回は有効な一括資料を見いだせなかった。

土器組成中に両耳壺が定着する。また、土器組成と直接は関係ないが、住居形態として柄鏡形住居跡が出現する段階でもある。

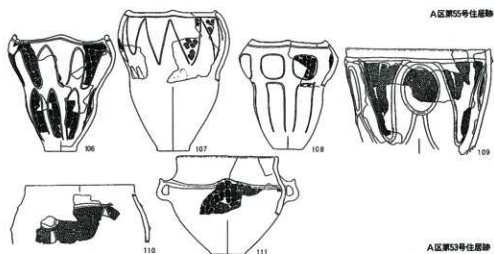
A区第56号住居跡は柄鏡形住居跡で、キャリバー類



第

7

期



118

と梶山類のセットである。キャリバー類 (86) は口縁部区画が楕円形の区画文となり、胴部に唐草文系の文様が施文される。この種の文様に充填縄文の手法が支配的であるのは前段階唐草文土器の集合沈線文の施文手法からの流れであろう。地文には部分的な異原体の挿入がみられる。

梶山類 (88) は波状口縁で、渦巻文の地文部がパネル状の小区画を構成する。この他に、口縁部が半月状の区画となり、渦巻文が小突起に代替されるキャリバー類 (87) と、無文の両耳壺 (90) が伴出している。

A区第16号住居跡もキャリバー類と梶山類が中心のセットである。キャリバー類 (91) は口縁部文様帯が波状区画文化し、磨消し懸垂文が垂下する。梶山類 (92) は水平口縁で、2本隆帯により文様が描かれる。

両耳壺 (92) は胴上半部に前段階のキャリバー類に由来する区画文を描くもので、橋梁状把手は上端が舌状に飛び出す。また、ひさご形土器 (第45図12) はこの時期に有孔罌付き土器から分化するものであろう。

ひさご自体は中期末葉に特有のプロポーションだが、上下2対の環状把手を持つ四つ手壺の構成は、後期段階に受け継がれることになる。

A区第48号住居跡は椀形住居跡で、吉井城山類と梶山類と両耳壺のセットである。

吉井城山類 (102) は、胴上半部に玉抱き文を描く洋光台猿田タイプである。

梶山類 (104) はひさご形の深鉢に隆帯渦巻文を施文するタイプである。千葉市芳賀輪道跡第134号住居跡から同種の深鉢の胴上半部が出土している (132~133)。

両耳壺 (105) の胴上半部の文様帯は長方形の区画と渦巻文の組み合わせで、前段階のキャリバー類に多くみられた手法である。両耳壺においてこうした伝統的な手法が残存することは、一方で母体となったキャリバー類においても伝統的な渦巻文の土器が残存している可能性を示すものであろう。

D区第32号住居跡も椀形住居跡で、吉井城山類と両耳壺のセットである。

吉井城山類 (100) は2本沈線による文様描写で、磨消し連歯文のイメージを引きずっている。両耳壺 (101) は胴上半部に区画文を描くもので、A区第48号住居跡出土のものに類似する。

D区第7号住居跡はキャリバー類と吉井城山類のセットである。キャリバー類 (94) は、口縁部文様帯に入り組み風の渦巻文を残しつつ、他方で渦巻文が円形の区画文に変化し、胴部の磨消し懸垂文の一部が口縁直下にまで貫入する。

吉井城山類は猿田タイプの玉抱き文 (95) と、磨消しによる楕円文が重畳するタイプ (96) が共存する。

D区第36号住居跡は、吉井城山類と一段懸垂文の深鉢、両耳壺に類似の広口壺がセットとなっている。吉井城山類 (97) は猿田タイプの玉抱き文を基本に、大波状の沈線区画の上下に楕円形の磨消しモチーフを振り分ける、南東北系の文様を忍び込ませたものである。吉井城山類と大木9式の関係を知るうえで重要な資料といえるだろう。

この他、A区第5 (新)・13・15・26・57・61号住居跡、同区第19・100・129号土壘、同区第1・14・25号埋壘、C区第7号住居跡、同区第1・2号埋壘、D区第1・3・13・17・18・19・20・21・55号住居跡等が本段階に含まれるものと思われる。

第7期

後期初頭、称名寺式期に該当する。実際には数段階の時間差を含んでいるが、例数が少ないため、単一の段階として取り扱った。

A区第55号住居跡は吉井城山類と南東北的な寸胴の深鉢、両耳壺のセットである。

吉井城山類 (106・107) は前段階からの変化に乏しいが、鋸歯状のモチーフが主流となるようだ。寸胴の深鉢 (109) は背の低い隆帯によりR字状のモチーフが描かれる。寄居町壺/下遺跡に同種の深鉢がみられる。

壺ノ下例はいずれも鈴木徳雄氏の編年 (鈴木1990) の第3段階以降にあたる、称名寺式でも比較的新しい段階の土器を伴っている。ただし、第55号住居跡出土

のものは口縁直下の四方に舌状の突起を持たないこと、共存する吉井城山類や両耳壺(111)は中期末葉と大差ないものが出土していること、類似のR字文が千葉市中野僧御堂遺跡第3号住居跡の堀山類にみられ、隆帯によるR字モチーフそのものは中期末葉から存在している可能性があること等から、称名寺式でも初期、鈴木編年における第1段階前後のものと考えたい。

D区第3号住居跡からは異形の片口土器(115)が出土した。これが唯一の復元個体であり、破片資料も比較的数が少なかったため、時期判定は困難である。

異形片口土器の類例は、横浜市市ノ沢団地遺跡C地区第1号敷石住居跡(137)や、同市稲ヶ原遺跡A地点B-4号住居跡(141)にみることができる。

市ノ沢団地例は破片を含め加曾利E系のみとのセットであるが、稲ヶ原例は多量の中津系の土器と共存するため、本遺跡D区第3号住居跡例も初期称名寺式に伴うものである可能性が高い。

D区第3号住居跡を切る同区第1号土壇の出土土器(114)も、当然後期の所産ということになるだろう。吉井城山類における波状の区画が口縁部の区画に施着してU字状の区画文へと変化している点が新しい要素といえようか。わらび手沈線が後期段階にまで残存している事実には注意したい。

A区第20号住居跡出土土器(119)は、実際には単独の埋設土器と考えられるものである。

山形の突起は浦和市明花東遺跡などの成立期の称名寺式に時折みられるもので、横浜市稲ヶ原遺跡A地点B-4号住居跡には大小の突起を4単位づつ交互配置にする例(139)も存在する。逆U字状の区画は中期末葉の曾利式以来の流れであり、ともに新しい要素と

はいえない。従って、本資料は106~115のような加曾利E系の土器に伴う最古段階の称名寺式であるものと判断した。

A区第46号土壇出土遺物は、加曾利E系の土器と、粗製土器2個体のセットである。117の粗製土器が南関東以西で中津系の土器と普通に共存するものであることから、本資料が後期に下るのは間違いのないところであろう。118の横位回転の縄文も、明らかに後期的な要素である。加曾利E系の116は鋸歯文が描かれ、A区第55号住居跡例に類似するが、内屈する口縁直下に舌状の突起を明確に持っていることから、若干時期が下る可能性が高い。口縁の形態から、いわゆる関沢類型の存在が明確になる鈴木編年第2~3段階にあたるものであろうか。

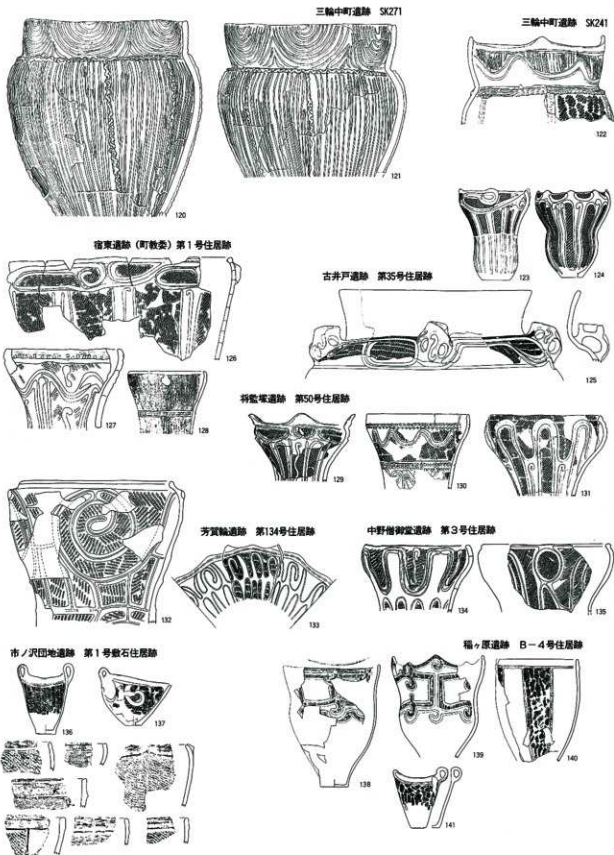
この他、A区第53号住居跡、D区第6号土壇等が後期初頭に該当するものと思われる。

今回の調査で遺構にからんで出土した縄文土器は以上で全てである。中期後葉の加曾利E I式古段階から後期初頭称名寺式の半ばまでは、ほとんど切れ目なしに遺構が存在することが明らかになった。

背後の中部高地からの影響をコンスタントに受けつつも、西関東、とりわけ武蔵野台地の在地的な色彩の濃厚な中期後葉に対し、後続する中期末葉の土器群は中部高地から南東北までを巻き込んだ多種多様な文様系列がめまぐるしく交錯する。この時期、関東平野西部の山際を南北に縦断する、著しい情報の加速化が想定される。

新資料の増加につれ、改めてその同時多発的なありさまがあらわになった柄鏡形住居跡の成立も、上記のような文脈のもとで語られるべき出来事なのかもしれない。

PL. 7 関連遺物一覽



2. 加曾利EⅢ式期の住居跡について

前段で述べたように、宿東遺跡における縄文時代中期末葉は、土器文様における磨消し縄文手法の隆盛、とりわけ吉井城山類の定着と、住居形態における柄鏡形住居跡の出現に特徴づけられる。

PL. 8に本遺跡出土の柄鏡形住居跡の位置関係を抜き出した。A区第55号住居跡が第7期である他はすべて第6期＝中期末葉に属する住居跡である。主軸は南西と南東を指すものがほぼ半々であり、また調査された範囲では住居跡の配置に規則性はみられない。

いうまでもないことだが、中期末葉以降に属する住居跡はこれが全てではない。土器組成のうえでは、加曾利E式の伝統的な要素である口縁部文様帯を残す一群、いわゆるキャリバー類は中期末葉にあっても消滅するわけではなく、他の類型と共存しつつ後期初頭に於ける土器様相に影響を与えてゆく。同様に、住居形態のうえでも張り出し部を持たないより伝統的な形態が、(少なくとも武蔵野台地においては) 柄鏡形とあ

る程度まで共存しているものと思われる。

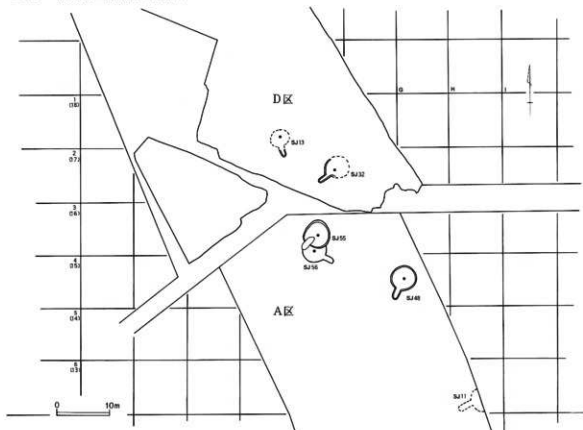
棟木構造系列

D区第6・26・47号住居跡(第5期)、第7・17号住居跡(第6期)、第3号住居跡(第7期)等は、楕円形や隅丸長方形プランを呈し、4本・6本といった偶数本の主柱穴を主軸線をはさんで左右対称に配置する伝統的な住居形態である。

石塚和則が行った中期前葉における上屋構造の復元(石塚1986)に習えば、これらは対称配置の主柱上に梁・桁をそれぞれ渡し、これに垂木を持たせかけて、主軸線上に存在する棟木を支持するスタイルと考えられる。以下「棟木構造系列」と呼ぶ。

加曾利EⅢ段階に顕著になる新たな特徴としては、
 ・4本主柱の配置が奥壁側に開く逆台形を呈する
 ・炉跡の位置が埋壁寄り＝出入口寄りに移動する
 等が挙げられるが、全体に掘り込みが浅く、諸施設の配置が不明確なものが多い。

PL. 8 柄鏡形住居跡位置関係図



三本柱系列

柄鏡形に先駆けて第5期に出現する特異な住居形態がある。楕円形ないし円形のコンパクトな堅穴で、床面中央部かやや前面に炉跡を持ち、主軸線上奥壁寄りに1本、炉跡前面で主軸をはさんで左右対称の位置に各1本、合計3本の主柱穴をもつ住居形態がそれである。柱穴の本数・配置には当然変則的なものも存在しようが、ここでは前述の三本柱穴が多くの住居跡に共通してみられることから、「三本柱系列」と呼称する。

三本柱系列の住居跡は第5期に棟木構造系列から分化して、第6期までは確実に存在する。A区第7号住居跡、C区第7号住居跡、D区第5・14A・15・24・40号住居跡（以上全て第5期）、D区第1・15・20A・21・36号住居跡（第6期）等が本系列に属するものであろう。

柄鏡形系列

北～南西間東における出現期の柄鏡形住居跡がそうであるように、宿東遺跡の柄鏡形住居跡も第6期に、明確な張り出しと壁柱穴構造を持つ完成された形態で出現する。A区第11・48・55・56号住居跡、D区第13・32号住居跡が本系列に属する。個別の住居跡の時期は前述の通りである。

柄鏡形住居跡の成立に関わる具体的な言及は、埋堊周辺の小張り出し施設からの発達を提唱した山本暉久を嚆矢として、最近では潜在的なものであった堅穴内部における空間区分が中期末葉において顕在化したとする秋田かな子の説が注目される。

柄鏡形系列の出現に先立って、三本柱系列の住居跡が現れることは既に述べた。柄鏡形系列の主体部との規模・形態上の類似や、北本市堤灯木山遺跡第2次調査第1号住居跡のように、初期の柄鏡形住居跡には地域を問わず、三本柱の構造を残す例がみられることから、柄鏡形系列は棟木構造系列から直接派生するものではなく、間に三本柱系列を介して成立している可能性が高い。そこで、笹森健一の内帯・外帯の発想（笹森1977）をもとに、三本柱から柄鏡形への転換に対する解釈を試みることにする。

笹森の内帯・外帯の概念は、環状の柱穴を結ぶ円Oに対し、円Oの中心から張り出し部先端までの長さを半径とする円周内部を円錐形の上屋に覆われた住居の範囲であると仮定し、二つの円周のうちの前者を内帯、後者を外帯と呼ぶもので、張り出し部の長さは円Oの直径のほぼ1/2であることから、内帯の直径≠外帯の半径となる。

柄鏡形住居跡の場合、環状に巡る壁柱穴の描くラインが住居構造上の内帯にあっていた。三本柱住居跡の場合には全体の重量配分を考慮して、柱穴が描く略二等辺三角形の重心（図中★）を中心として、3本の柱穴が乗る円周の内側を内帯と考えた。結果として円Oの中心が2本の柱穴が対置される入り口空間側に若干寄り寄ることになった。

さらに、三本柱住居跡の上屋を柄鏡形住居跡において想定されたのと同様の円錐形と仮定したうえで、内帯の直径を半径とする同心円を描き、この円周と内帯との間の空間を外帯と考えた。

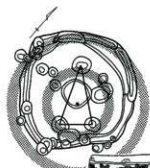
本遺跡出土の三本柱系列の代表的なもの2例をPL-9上段に呈示した。図上スクリーントーンで表示したのが内帯と外帯である。

一見して、内帯の円周に象徴される上屋構造が全体に入り口部に偏りに偏っている点が指摘し得る。必然的に堅穴の壁から出入り口部の葺き下ろしまでの間に余白が生じる。壁柱穴構造をとる入間市坂東山遺跡第19号住居跡（第5期）、駒西町修理山遺跡第1号住居跡（第6期）等において、この余白は一層基だしいものとなる。そして、これこそが張り出し部の発生の素地となるものと考えられる。

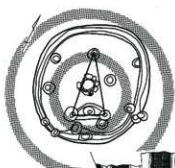
次に、柄鏡形住居跡について、その内帯・外帯と諸施設との位置関係をみてみよう。柄鏡形住居跡の場合、上屋を支えるのが主として壁際を巡る壁柱穴である関係上、三本柱系列から比べると内・外帯ともに拡大される傾向にある。初期柄鏡の基本構造ともいえる張り出し部・連結部の2基の埋堊は、内帯・外帯それぞれの入り口空間に配置されていることになる。

三本柱系列の埋堊は内帯における入り口空間のみ

《三本柱系列》



D区第14号住居跡



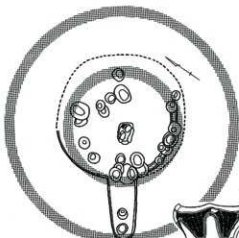
D区第20A号住居跡



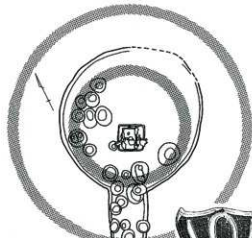
入間市坂東山遺跡
第19号住居跡



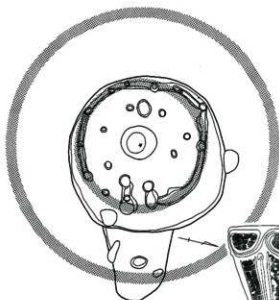
《柄鏡形系列》



D区第32号住居跡



A区第48号住居跡



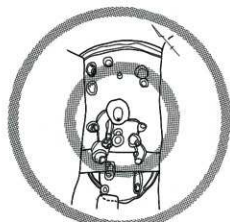
北本市提灯木山遺跡
第2次調査 第1号住居跡



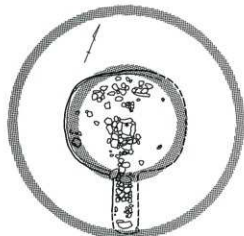
0 5m



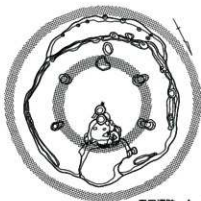
愛宕原遺跡 第6号住居跡
《複式炉系列》



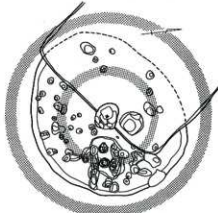
修理山遺跡 第11号住居跡



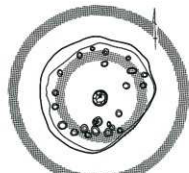
西小路遺跡 第6号住居跡
《柄鏡形系列》



春田遺跡 1a号住居跡



高登遺跡 S1036
《擬複式炉系列》



修理山遺跡 第1号住居跡
《壁柱穴系列》



に設置されるのに対し、柄鏡形系列ではこれに外帯部の埋巻が累加されている。この、内外二重の入り口施設を持つ構造こそが、柄鏡形住居跡の本質であると考えられる。外帯部分にもう一つの出入り口空間を意識させることになった原因としては、堅穴の壁の立ち上がりから上屋の葺き下ろしまでの空間の拡大が想定され、そして、堅穴プランに対する葺き下ろし=外帯の拡大の原因となったのは、内帯の拡大=壁柱穴構造の導入に他ならない。

壁柱穴系列

壁柱穴構造の由来については様々な要素が考えられるが、一つには下総台地からの影響があったものと思われる。この地域における壁柱穴構造は、宿東遺跡における第5期には明瞭に存在し、6期=中期末葉になっても柄鏡形の住居跡はほとんど出現しない。

こうした東関東的な住居構造を壁柱穴系列と呼称する。宿東遺跡においては第5期のD区第11号住居跡他が壁柱穴を巡らせる。中期末葉の騎西町修理山遺跡第1号住居跡が中鏡的な柱穴配置を取りつつも張り出しを持たないのは、やはり東関東的なあり方とみていいだろう。

複式炉系列

複式炉は、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけて、東北地方中～南部一帯に分布するもので、複数の燃焼部を有する炉形態を指して用いられる名称であり、中期末葉段階では燃焼部と壁との間に前庭部と呼ばれる落ち込みが設けられる。逆に言えば、炉跡が前庭部を介して堅穴の壁に取り付く構造である。

東北地方北部には単式の炉が前庭部を介して堅穴の壁に取り付く「沢部型複式炉」(市川・古市1977)が存在し、一方で分布の南限は新潟県・栃木県に及んでおり、1例だけだが埼玉県児玉町古井戸遺跡でも報告されている。

中期末葉における複式炉を伴う住居形態(以下、「複式炉系列」)の柱穴配置が、前庭部に対する奥壁寄りに偏る事実は既に多くの研究者により指摘されてきた。そこで、複式炉系列の住居跡の平面構造に、前述

の内帯・外帯の同心円構造を重ね合わせてみると(PL.10)、興味深い事実が浮かび上がる。内帯と堅穴の立ち上がりとは奥壁部で限りなく近付いているのに対応して、住居跡前面、端的には複式炉前庭部が、外帯のラインに接近しているのである。

前庭部の機能としては、複式炉中央の石囲部に対応する焚き口が想定されているが、一方でその特異な形態から祭祀的な意味合いをも想定されてきた。しかし、複式炉系列にみられる柱穴・炉等の諸施設の特異な配置が、前庭部と呼ばれるしばしば堅く踏みしめられた落ち込みを外帯=住居外部の空間へと近づけることを目的とした措置であると仮定するならば、そこに形を変えた出入り口施設としての機能を想定することも、あながち間違えとはいえないのではないだろうか。

複式炉の前庭部は後期初頭に入ると壁から分離し、小規模な石囲いの施設に代替される。無論これは燃焼部に対する焚き口の機能を果たしはしない。複式炉そのものの消滅に先立って衰退の道をたどる前庭部は、複式炉の本質的な機能に関わる部分ではありえないという中村良幸(中村1986)の指摘は頗る値する。祭祀云々という検証不可能な議論ともかくとして、複式炉の光熱施設+出入り口部という構造から、この時期に出入り口部という性格が分離独立したと考えるのは果たして無謀であろうか。

出入り口施設を有する住居跡

複式炉系列はロングハウスの伝統が崩れた後に出現する住居形態であり、堅穴の一端を外帯寄りに掘り広げることで入り口部の施設を形成したのもと思われる。

一方、三本柱系列は加曾利EⅡ式までの棟木構造系列が崩れはじめる時期に出現している。堅穴の壁と外帯との間の空白は当初からある程度存在しているが、壁柱穴構造の選択によってさらなる空白の拡大を生じる。この結果、堅穴前面以外に、外界との境界をなす葺き下ろしの前面に出入り口施設である埋巻を累加する必要が生じ、二つの出入り口施設を連結するものとして細長い張出部が出現したものとともわれる。

埋壘を伴う張出部は、連結部埋壘から発達・伸長したのではなく、出入口施設の果加によって出現したと思われる。こうした前提に立つならば、張出部の発達が不十分な中間形態が存在しないのは自然なことといえるのではないか。

擬複式炉系列

ところで、前出の修理山遺跡からはさらにもう1例、特異な構造を有する住居跡が出土している。第11号住居跡がそれで、炉跡から壁に至る長方形の掘り込みを伴っている。落ち込みの両側縁には小ピットが並び、炉跡よりの一端には埋壘を伴っている。ともに中期末葉に属することや、埋壘や炉跡との位置関係などから、この長方形の落ち込みは同時期の柄鏡形系列における張り出し部に相当するものとみられる。

同様の住居構造を千葉県袖ヶ浦町嘉登遺跡SI036にみることができる。不整形プランで、柱穴は壁から距離をおいて環状に巡る一種の壁柱穴配置を構成する。炉跡からは若干距離をおくものやはり壁に取り付く長方形の落ち込みを有しており、埋壘は落ち込み中央部および炉跡よりの一端に1基づつ配される。

以上2例の炉跡が長方形の落ち込みを介して壁に取り付くという外見上の特徴や、これに埋壘土器が介在するありかたが複式炉に類似しているため、「擬複式炉系列」と呼称したい。

擬複式炉系列における炉跡前面の落ち込みは、柄鏡

形住居跡における張り出し部に相当する意味を持つものと思われる。柱穴は堅穴の壁溝よりも内側を巡るため、外帯のラインと主体部の壁との位置関係は三本柱系列に近いものとなっている。したがって主体部外に長大な張り出しを必要としない。

ここで問題としたいのは、分布圏を異にしつつ縄文時代中期末葉に出現する柄鏡形住居跡と複式炉（前庭部）を伴う住居形態が、擬複式炉系列というある種中間的な様相をはさんで共通した系譜のうえに連なる可能性が出てきたことである。

擬複式炉系列は、複式炉系列と柄鏡形系列の中間的な様相を示すものであろう。下総台地を中心とした東関東、さらに北関東一帯にあって、明確な出入口施設の痕跡を残さない壁柱穴の住居跡や客体としての複式炉系列以外に、こうしたものが定型的に存在していた可能性を指摘しておきたい。

棟木構造やロングハウスといった本格的な上屋構造を持った住居形態が崩れた後に、葺き下ろし式の簡易な上屋を持ったより小規模な住居形態が出現し、これにともなって堅穴主体部と葺き下ろしの外部とをスムーズにつなぐ出入口施設が設けられる。複式炉系列と柄鏡形系列の発生は、このような共通の文脈のもとで縄文時代中期末葉の東日本一帯で発生した一連の出来事であったものと思われる。

3. 掘立柱建物跡

宿東遺跡からは5棟からなる掘立柱建物跡群が検出された。検出地点の内訳はA区で4棟、D区で1棟である。ほぼ正方形のA区第2号掘立柱建物跡を除けばすべて長軸・短軸を有し、1間×1間の単純な配置ゆえに構造は不明ながら、妻側と平側の区別が存在しているものと思われる。

規模は、最大のD区第1号掘立柱建物跡で3.5m×3m、最小のA区第2号掘立柱建物跡が2.8m×2.8mで、平側が3m前後、妻側がそれより若干短いものが多く、明確な規格は存在しないものの、身体尺のよう

なある種の基準に基づいて設計されている可能性がある。

棟の方向は建物群南に群集するA区第2～4号掘立柱建物跡はN-29°-38°-Wであるが、建物群中央部のA区第1号掘立柱建物跡ではN-42.5°-W、最北端のD区第1号掘立柱建物跡ではN-85°-Wを指している。他の遺構との対応関係は不明であり、そもそも何棟までが同時に存在していたかも不明であるが、遺跡の南西部に入り込む谷のラインを意識して、平側の一面を谷に向けて配置されている様子がうかがわれ

る。

遺構の時期は不明であるが、A区第1号掘立柱建物跡が第6期の埋塞に切られていることや、周辺の遺構の時期などから、本遺跡における土器編年上の第3～6期の間に収まるものであろう。

縄文時代の掘立柱建物跡については石井寛によって資料の集成が行われており（石井1995）、埼玉県内の例についても後期を中心とした若干の資料が呈示されている。

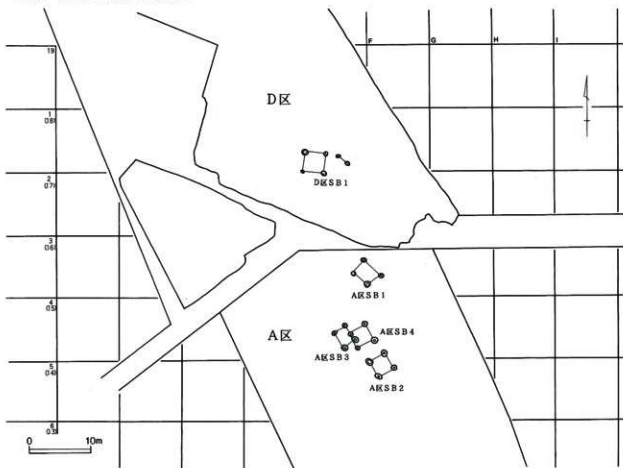
県内最古の例としては、狭山市八木前遺跡から4.33m×3.23mの長方形配列の土壌が検出されており、覆

土中から黒浜式の土器が出土している（書上他1996）。

「方形配列土壌」として報告されているが、土壌の規模や配置からみて建物跡と考えていだろう。石井が阿久型と呼んだ長野県内の事例との関連は不明だが、縄文時代各期を通じ、この種の柱建ちの構造物が存在する素地は常にあったものとみられ、今後の集落調査における注意を喚起したい。

宿東遺跡出土の掘立柱建物跡は埼玉県内で二番目に古いものであり、それが中期後葉～末葉のある時期には集落内に群集をなすほどに恒常的に存在していたことを示す資料であった。資料の増加が待たれる。

PL.11 掘立柱建物群位置関係図



主要参考文献

- 青木 義晴 1995年 『明花東遺跡』 浦和市遺跡調査会報告書第181集
- 秋田かな子 1995年 『形鏡形住居の一構造』 『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集』
- 浅川 滋男 他 1996年 『日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウムI『堅穴住居の系譜』討論の記録』
- 新井 崇 他 1996年 『千代遺跡群 一縄文時代編一』 埼玉県江岸町千代遺跡群発掘調査報告書1
- 石井 寛 1995年 『縄文時代掘立建物址に関する諸議論』 『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集』
- 石塚 和則 1986年 『野塚塚 一縄文時代一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 磯野 治司 1996年 『提灯木山遺跡 第2次調査』 北本市遺跡調査会報告書第2集
- 市川 金丸・古市 豊司 他
- 1977年 『三内沢部遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
- 今井 亮 他 1996年 『西ノ原遺跡』 大井町遺跡調査会報告書第6集
- 上野真由美 1997年 『広木上宿遺跡 一縄文時代編一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第185集
- 梅沢太久夫 1997年 『日高市史 原始・古代資料編』 日高市史編集委員会・日高市教育委員会
- 岡野 雅章 他 1982年 『宿東・後耕地』 日高町埋蔵文化財調査報告書第三集
- 書上 元博 1996年 『八木上/八木/八木前/上広瀬北/森坂北/森坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
- 金子 直行 1997年 『戸崎前遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集
- 加納 実 1989年 『千葉県における加曾利E式土器後半の様相』 『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第112集
- 菊池 実 1990年 『田塚中原遺跡』 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第31集
- 喜多 圭介 1989年 『長田雄子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』 千葉県文化財調査協会
- 倉田 義広 1988年 『千葉県芳賀輪遺跡一昭和61年度発掘調査報告書一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集
- 黒坂 慎二 他 1995年 『向山/上原/向原』 『情報』2・3
- 笹森 健一 1997年 『縄文時代住居址の一考察』 『情報』2・3
- 柴田 俊彰 他 1998年 『昭和63年度市道原宿愛宕原1号線建設関連遺跡調査報告 愛宕原遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第31集
- 鈴木 徳雄 1990年 『称名寺・堀之内1式研究の諸問題一南関東地域の資料を中心として』 『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』
- 谷井 彪 1973年 『坂東山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集
- 谷井 彪 1987年 『加曾利E式土器における口縁部文様と形態の系譜』 『埼玉の考古学』
- 谷井 彪・細田 勝 1997年 『水窪遺跡の研究 一加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性一』 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第13号』
- 谷井 彪 他 1982年 『縄文中期土器群の再編』 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要1982』
- 塚原 孝一 1994年 『三輪村町遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第143集
- 長沢 宏昌 他 1997年 『市ノ沢印地遺跡』 市野沢印地遺跡調査団
- 中平 薫 他 1986年 『宿東一第2次発掘調査報告一』 日高町埋蔵文化財調査報告第10集
- 中平 薫 他 1988年 『宮ノ後・宿東一第4次調査 第5次調査一』 日高市埋蔵文化財調査報告第13集
- 中平 薫 他 1994年 『宿東一7次調査一』 日高町埋蔵文化財調査報告第24集
- 中平 薫 他 1995年 『宿東一9・10次一』 日高市埋蔵文化財調査報告書25集
- 中村 良幸 1986年 『観音堂遺跡第1次~6次発掘調査報告書』 大治町埋蔵文化財報告書第11集
- 西原 嵩浩 他 1994年 『嘉登遺跡・大竹長作古墳群』 君津郡考古資料刊行会
- 浜野美代子 1990年 『提灯木山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第92集

日野 一郎 他	1996年	『中谷遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集
平子 順一 他	1992年	『稲ヶ原遺跡A地点』	財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
福島 邦男	1989年	『平石遺跡 -緊急発掘調査報告書-』	望月町文化財調査報告書第17集
細田 勝 他	1994年	『樋ノ下遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
宮井 英一	1989年	『古井戸-縄文時代-』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
村田 章人	1997年	『原ノ谷畑』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
森 幸彦	1996年	『複式戸小考』	『論集しのぶ考古』
山崎 充浩 他	1990年	『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 3』	福島県文化財調査報告書第235号
山下 歳信	1994年	『西小路遺跡』	群馬県勢多郡大胡町教育委員会
山本 暉久	1993年	『横浜市洋光台猿田遺跡発見の杯鏡形住居跡とその出土遺物』	『縄文時代』 4
山本 暉久 他	1997年	パネルディスカッション『敷石住居の謎に迫る』資料集	神奈川県立埋蔵文化財センター・(財)かながわ考古学財団
吉田 稔	1995年	『修理山遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第158集
渡辺 新	1997年	『復構造戸の住居跡・集塊する土坑墓群-市川市高谷津遺跡の事例紹介と若干の考察』	貝塚博物館紀要第24号
渡辺 一雄 他	1984年	『台田遺跡発掘報告』	福島考古 第25号

付 編

宿東遺跡出土黒曜石の化学分析

目 次

- 1 実験条件
- 2 実験結果の取扱
- 3 化学分析結果 (中期総合)
 - 3-1 Rb-Srの相関について
 - 3-2 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について
 - 3-3 Fe_2O_3 - Na_2O の相関について
 - 3-4 K_2O - CaO の相関について
- 4 まとめ

鑑 定 報 告

(株) 第四紀 地質研究所 井上 巖

1 実験条件

化学分析は日本電子製 J S X 3200型蛍光X線分析装置でおこなった。

実験条件は加速電圧: 30kV、電流: 自動、有効測定時間: 200秒でおこなった。

分析指定元素はNa, Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zrの13元素である。

2 結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法 (13元素全体で100%になる) で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてRb-Sr, SiO_2 - Al_2O_3 , Fe_2O_3 - Na_2O , K_2O - CaO の各図を作成した。これらの図をもとに、黒曜石を元素の面から分類した。Rb(ルビジウム) - Sr(ストロンチウム) は重量% (Wt%) ではなく、積分強度 (I) で分析した。

第1表化学分析表には宿東遺跡から出土した黒曜石の製品とフレイクの分析値が記載してある。これらの分析結果と比較対比したのは長野県、群馬県、神奈川県、静岡県、東京都などの原産地の黒曜石の分析値である。

原産地の黒曜石の分析結果に基づいて原産地分布図として第1図Rb(ルビジウム) - Sr(ストロンチウム) 図、第2図 SiO_2 - Al_2O_3 図、第3図 Fe_2O_3 -MgO図、第4図 K_2O - CaO 図を作成した。第1図Rb(ルビジウム) - Sr(ストロンチウム) 図は重量%ではなく、積分強度で作成した。第2図~第4図は重量%で作成した。

3 化学分析結果 (縄文中期総合)

3-1 Rb-Srの相関について

第5図Rb(ルビジウム) - Sr(ストロンチウム) 図に示すように宿東遺跡の黒曜石は冷山黒曜石原産地系のIとIIの2グループと和田峠系のIIIグループに分かれる。

後の項で述べるように和田峠系の領域にある宿東-5と6は和田峠系ではなく冷山黒曜石原産地系であり、冷山系の領域にある宿東の11と12は和田峠系である。このようにRb-Srの相関では一部に誤差が生じる。

3-2 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図に示すようにIとIIの2グループに分かれる。Rb-Srの相関では3グループに分かれたが元素組成ではそのほとんどが冷山の領域に集中し、IIグループを形成する。成分的には明らかに冷山の黒曜石だけであることがわかる。IIグループには製品、フレイクが共存する。

Iグループは明らかに異なる元素組成をするもので、宿東-11と12の2個が該当する。この2個は冷山の領域ではなく和田峠系の領域に集中する。

宿東-3は現在のところ該当する原産地はなく、いくぶん成分が異なる。

3-3 Fe₂O₃-Na₂Oの相関について

第7図Fe₂O₃-Na₂O図に示すようにIとIIの2グループに分かれる。Iグループは冷山の領域にあり、IIグループの宿東-11と12の2個は和田峠系の領域である。

Iグループには製品、フレイクが集中して共存する。宿東-3はFe₂O₃の値が高く、異質である。

3-4 K₂O-CaOの相関について

第8図K₂O-CaO図に示すようにIとIIの2グループに分かれる。Iグループの領域にはI-1とI-2の2グループが存在するように見受けられる。これは冷山の中でいくぶん成分が異なるもので、黒曜石の同じ露頭の中の異なる層を意味しているのではなかろうか。IIグループの領域は和田峠系の黒曜石の領域と一致するものである。Iグループには製品、フレイクが共存する。

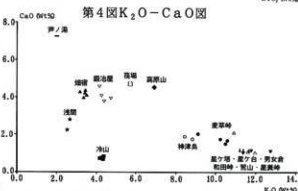
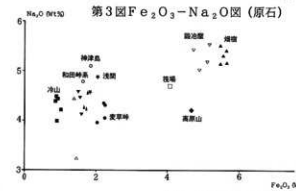
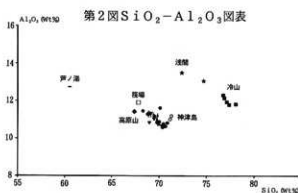
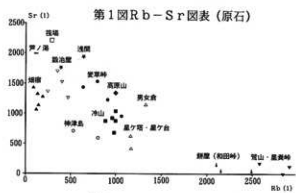
4 まとめ

1) 宿東遺跡の黒曜石はRb-Srの相関では和田峠、星葉峠の領域にあるものが認められたが、元素組成ではこれらの領域のものは冷山の黒曜石の領域のものであった。冷山の領域の中において和田峠系は宿東-11と12の2個であり、いくぶん誤差が認められる。

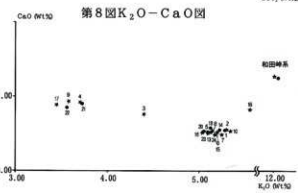
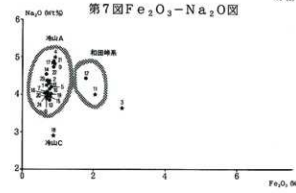
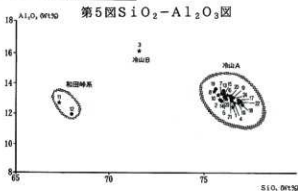
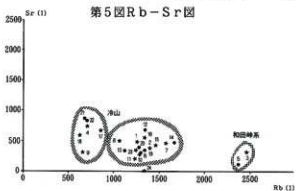
2) 宿東遺跡の黒曜石の製品とフレイクは元素組成ではその大半が冷山のものである。和田峠系は宿東-11のフレイクと宿東-12の製品だけである。宿東-3は明らかに異質で、現在の原産地のデータの中に該当するものはない。

第1表 化学分析表

試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	B ₂ O ₃	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	Total	Rb (10 ³ ppm)	Sr (10 ³ ppm)	備考
宿東-1	4.9410	0.0000	12.5122	75.4723	5.2923	0.5550	0.1141	0.0519	0.6884	0.0170	0.0068	0.0249	0.0123	100.0001	1284	481	フレイク 冷山
宿東-2	4.2528	0.0000	12.8643	75.8213	5.2889	0.5596	0.1220	0.0548	0.7575	0.0184	0.0082	0.0090	0.0135	100.0000	1401	380	フレイク 冷山
宿東-3	3.6491	0.0000	16.1655	71.5828	4.5834	0.7614	0.4159	0.1461	2.8021	0.0414	0.0057	0.0114	0.0028	100.0002	3461	330	フレイク 冷山-C
宿東-4	4.9774	0.0000	12.7135	76.5139	3.7154	0.9105	0.1465	0.0831	0.9039	0.0083	0.0089	0.0039	0.0094	100.0001	704	736	フレイク 冷山
宿東-5	4.1921	0.0000	13.0459	76.0516	5.0926	0.5374	0.0905	0.1182	0.8173	0.0205	0.0616	0.0049	0.0167	100.0001	2379	119	製品 冷山
宿東-6	3.9002	0.0000	13.1690	76.2796	5.1825	0.5259	0.1235	0.0840	0.6885	0.0163	0.0039	0.0055	0.0101	100.0000	1297	200	フレイク 冷山
宿東-7	4.0618	0.0000	13.2980	75.9000	5.2410	0.4938	0.1368	0.0731	0.7182	0.0205	0.0680	0.0083	0.0124	100.0000	1278	461	フレイク 冷山
宿東-8	4.2832	0.0000	13.4921	75.5236	5.1437	0.5482	0.1326	0.0847	0.7525	0.0120	0.0064	0.0028	0.0098	100.0001	1066	511	フレイク 冷山
宿東-9	4.7809	0.0000	13.0891	76.5103	3.5794	0.9300	0.1465	0.0810	0.8779	0.0078	0.0038	0.0009	0.0124	99.9999	697	313	フレイク 冷山
宿東-10	4.1842	0.0000	13.2326	75.3374	5.3215	0.5395	0.1514	0.0800	0.7811	0.0162	0.0035	0.0022	0.0084	100.0000	1290	275	フレイク 冷山
宿東-11	3.9972	0.0000	12.7436	87.3086	12.0182	1.2935	0.2989	0.2147	2.0358	0.0488	0.0073	0.0093	0.0241	99.9999	1242	197	フレイク 和田峠系
宿東-12	4.4128	0.0000	11.9851	87.9414	12.0886	1.2346	0.2534	0.2138	1.7702	0.0500	0.0038	0.0000	0.0294	100.0001	1352	681	製品 和田峠系
宿東-13	3.8260	0.0000	13.5141	75.9950	5.1280	0.5279	0.1276	0.0807	0.7605	0.0139	0.0043	0.0013	0.0104	100.0000	1123	326	製品 冷山
宿東-14	4.5247	0.0000	12.8116	75.8000	5.2194	0.5188	0.1311	0.0804	0.6792	0.0200	0.0058	0.0059	0.0126	100.0000	1219	471	製品 冷山
宿東-15	3.9355	0.0000	13.3115	76.0979	5.1907	0.5262	0.1248	0.0818	0.7775	0.0120	0.0064	0.0028	0.0098	100.0001	1451	429	製品 冷山
宿東-16	4.0220	0.0000	12.7440	76.7875	5.2363	0.5288	0.1153	0.0805	0.8260	0.0183	0.0077	0.0030	0.0134	100.0001	1346	650	フレイク 冷山
宿東-17	4.3127	0.0000	12.9077	76.7888	4.6501	0.8899	0.1296	0.0810	0.8000	0.0100	0.0079	0.0000	0.0102	99.9999	859	668	フレイク 冷山
宿東-18	2.9054	0.0000	12.5829	76.9999	5.5469	0.8244	0.1601	0.0722	0.8656	0.0079	0.0076	0.0032	0.0110	100.0000	616	690	フレイク 冷山-C
宿東-19	4.0230	0.0000	13.6249	75.5913	5.1181	0.5809	0.1386	0.0772	0.8104	0.0170	0.0046	0.0023	0.0127	100.0000	1348	353	製品 冷山
宿東-20	3.9002	0.0000	13.1934	76.2723	5.0538	0.5311	0.1074	0.0798	0.6974	0.0159	0.0050	0.0073	0.0165	100.0001	1283	396	製品 冷山
宿東-21	4.8783	0.0000	12.8780	76.4658	3.7154	0.9069	0.1727	0.0721	0.8782	0.0079	0.0104	0.0000	0.0098	100.0001	673	668	製品 冷山
宿東-22	4.7211	0.0000	12.8292	76.2004	3.5643	0.8520	0.1514	0.0790	0.8651	0.0094	0.0121	0.0000	0.0145	100.0000	597	822	製品 冷山
宿東-23	4.2728	0.0000	12.8629	76.1271	5.0993	0.5182	0.1073	0.0804	0.6915	0.0182	0.0042	0.0026	0.0089	99.9999	1347	341	フレイク 冷山
宿東-24	3.9838	0.0000	12.9862	76.4333	5.1708	0.5048	0.1080	0.0790	0.6998	0.0176	0.0000	0.0013	0.0134	100.0001	1337	6	フレイク 冷山



- | | | |
|------------|-----------|-------|
| ● 定草峠 | △ 尾ヶ台・男女倉 | ▽ 高深山 |
| ■ 沖山 | ○ 神津島 | □ 瑞穂 |
| ▽ 瑞山・高深峠 | ◆ 高深山 | ◇ 戸ノ瀨 |
| ↑ 瑞穂 (和国神) | ▲ 瑞穂 | ★ 法郎 |



- | |
|--------|
| ● 製品 |
| ★ フレイク |

写真图版



遺跡全景



遺跡遠景



A·B区 全景



C区 全景



D区 全景



A区第1号住居跡全景



A区第2号住居跡全景



A区第5号住居跡全景



A区第5号住居跡炉跡1



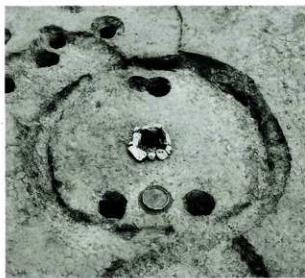
A区第5号住居跡炉跡2



A区第6号住居跡全景



A区第5·7号住居跡全景



A区第7号住居跡全景



A区第7号住居跡埋壘



A区第8号住居跡全景



A区第8号住居跡炉跡



A区第11号住居跡埋壘1·2



A区第11号住居跡埋壘 3



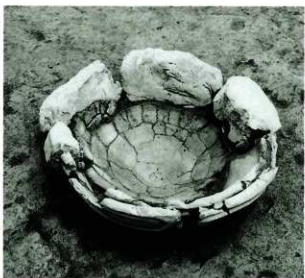
A区第15号住居跡全景



A区第16号住居跡全景



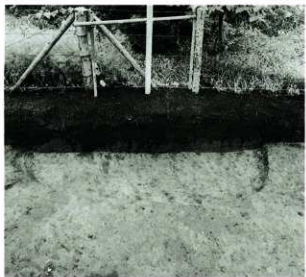
A区第16号住居跡遺物出土狀況



A区第16号住居跡炉跡



A区第16号住居跡埋壘



A区第17号住居跡全景



A区第19号住居跡全景



A区第19号住居跡遺物出土状況



A区第20・21・23号住居跡全景



A区第24号住居跡全景



A区第24号住居跡埋葬



A区第26号住居跡全景



A区第26号住居跡炉跡・埋甕



A区第27号住居跡全景



A区第28号住居跡全景



A区第33号住居跡炉跡



A区第33号住居跡埋甕



A区第37号住居跡埋裏



A区第39号住居跡全景



A区第40~43号住居跡全景



A区第42号住居跡埋裏



A区第43号住居跡全景



A区第43号住居跡炉跡



A区第44号住居跡全景



A区第44号住居跡遺物出土状況



A区第44号住居跡遺物出土状況



A区第44号住居跡遺物出土状況



A区第44号住居跡遺物出土状況



A区第45号住居跡全景



A区第46号住居跡炉跡



A区第46号住居跡ミニチュア土器



A区第47号住居跡全景



A区第47号住居跡炉跡



A区第48号住居跡全景



A区第48号住居跡礎・遺物出土状況



A区第48号住居跡完掘



A区第48号住居跡炉跡



A区第48号住居跡埋壺1



A区第48号住居跡埋壺2



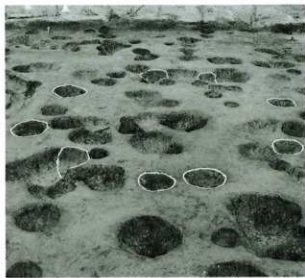
A区第52号住居跡全景



A区第52号住居跡炉跡



A区第52号住居跡炉体土器



A区第53号住居跡全景



A区第54号住居跡炉跡



A区第55号住居跡全景



A区第55号住居跡礫・遺物出土状況



A区第56号住居跡全景